

電気なしでは現代生活は成り立たないが、電力の約三割を担う原子力発電は、核燃料の燃え殻の後始末に難問を抱えている。

日本では使用済核燃料を再処理してプルトニウムを取り出す。このこと自体問題だが、あとに残る高レベル放射性廃棄物（HLW）も非常に厄介なのだ。

HLWは強烈な放射能と発熱があるので、三十年以上地上で冷まして、地下数百メートルに埋め捨て（地層処分）するのがベストとされている。ただし、十万年近く閉じ込めておく必要があるから、地震の影響などを受けない場所を探す。すでに、建設・操業・埋め戻しに七十年も要するような大規模

原発燃料の燃え殻

石橋 克彦

な処分場をどこかに建設する計画が始まった。

しかし、地殻変動が激しい日本列島では、十万年間確実に安全といえる場所を事前に選ぶことは不可能だろう。地震に関して言えば、

活断層がなくても大地震は起こるし、やや遠方の大地震でも処分場の地下水の動きなどに影響を与えて、放射能を地表に漏出させる危険があるからだ。

つまり、私たちの浅知恵で地層処分を実施することは、未来の人類や地球に大きな災害を及ぼしかねない無責任な賭だといえる。その結果は、場合によっては

アスベスト被害の比ではないかもしれない。私たちの目の前からHLWが消えればよいというのは、マイカーから空き缶をポイ捨てするのと変わらない。

原発の燃え殻は私たちの責任で始末しなければならぬ。だが、それが非常に難しいとなると、原発の再考とともに、燃え殻を極力出さないこと、つまりは電気浪費をやめることが先決になるだろう。オール電化住宅などは疑問である。

私たちは、自分たちの震災を心配するだけではなく、未来世代への加害者にならない責任をも厳しく自覚すべき時代にきている。

随想

(いしばし・かつひこ)

神戸大学教授・地震学